

令和6年度 1学年スピーチコンテストの概要

1. 目的

国際理解教育の一環として生徒の英語によるスピーキング力を向上させること。

2. スケジュール

日時	
7月11日～18日	スピーチ題材紹介・事前アンケート
7月21日～9月下旬	各自生徒による暗唱練習
9月27日～10月4日	1次予選（英語コミュニケーションⅠ授業内）
10月15日～21日	2次予選（コミュニケーションスキルズⅠ授業内）
10月下旬～	各クラスの代表生徒対象個別指導期間
11月13日	スピーチコンテスト決勝

3. 今年度、レシテーションを行う題材としたスピーチ

人物	タイトル	テーマ
Barak Obama	Obama's Speech in Hiroshima	世界平和、民主主義
Charles Chaplin	The Great Dictator	資本主義、民主主義
Emma Watson	HeForShe Speech	ジェンダー平等
Hillary Clinton	First Lady Hillary Rodham Clinton's Remarks to the Fourth Women's Conference	ジェンダー平等
Lady Gaga	Dear Class of 2020	人種差別
Queen Elizabeth II	We Will Meet Again Speech	他者への思いやり
Selena Gomez	"Trust Yourself"	自分を信じよう
Steve Jobs	Connecting the Dots	点をつなぐ

4. 評価項目と目安

①Pronunciation (発音・アクセント)

個々の単語が適切に発音できている。第一強勢（アクセント）がわかるようにメリハリをつけて話している。

②Attitude (Non-verbal communication) (非言語コミュニケーション)

聞き手に対して適切にアイコンタクトをとることができているか。全体に気を配りながらスピーチを行うことができているか。言葉以外の部分で、スピーチのメッセージを相手に伝えようという気持ちが感じられるか。

③Fluency & Expression (流暢さ、イントネーション)

スピーチらしい自然な流れ、速さで話すことができているか。適切な意味の切れ目で読む

ことができている。スムーズにリズムよく話せる。強調すべきところは、他より大きな声にしている。強弱の変化をつけていることがはっきりわかる。

④Memorization（暗唱）

きちんと暗唱できている。5秒以上止まらないことが目安。

5. 生徒によるアンケートの結果とまとめ

11月13日（水）スピーチコンテスト（レシテーションコンテスト）終了直後に1学年生徒を対象にしたアンケートを実施した（回答数は257）。結果は以下の通りである。

※数字表記は回答数（%）

質問1 夏休みから準備の始まった「レシテーションコンテスト」が、あなたの「スキルや能力の向上につながった」と、どの程度思いますか。

そう思う	59 (23.0%)	肯定的回答数計
ややそう思う	139 (54.1%)	198(77.1%)
どちらともいえない	36 (14.0%)	
あまりそう思わない	15 (5.8%)	
そう思わない	8 (3.1%)	

質問2 そのように思う理由を記入してください。（抜粋）

そう思う・ややそう思う
英語のスピーチを覚えるために何度も声に出して覚えていたので発音も少しは良くなつたと思った / 一つ一つの単語の発音を意識して音読するようになった / 文のどこに抑揚をつけたりしたらよいか考えることができた / 暗記できて文章の組み立て方が分かったから / 影響力のある人達の考え方方がわかると同時に、その時どのような心情だったかを学ぶことができるから / どう工夫すれば聞き手に思いが伝わるかなどの点も考えて練習していて、とてもやりがいのある貴重な経験だったからです / ただ英単語を並べて話すのではなくその中で自分の思いや伝えたいことを文の中に工夫して話し方など含めて大切だと思った / 人前で発表をすることが好きになったから

どちらともいえない・あまりそう思わない・そう思わない
ただ暗記するだけでなんも考えたりせずにやってしまっていたため / ちゃんとした準備ができていなかったと思ったから / あまり練習がとれなかった / 練習しなかったから成長したと感じれなかった / 暗記をするだけで読解に繋がるとは思えなかった

質問3 「レシテーションコンテスト」によって向上したと思う能力・スキルとしてあてはまるものをすべて選んでください。

1つ1つの英単語を正しく発音する力	139 (54.1%)
英文をリズムよく流ちょうに読む力	123 (47.9%)
ジェスチャー・身振り手振りを効果的に使う力	41 (16.0%)
多くの人の前で話す度胸・勇気	109 (42.4%)
他人の発表を参考にして自分の学びにつなげる力	68 (26.5%)
特はない	13 (5.1%)

質問4 「レシテーションコンテスト」は「楽しい」という点についてはいかがですか。

そう思う	31 (12.2%)	肯定的回答数計 110(43.3%)
ややそう思う	79 (31.1%)	
どちらともいえない	81 (31.9%)	
あまりそう思わない	33 (13.0%)	
そう思わない	30 (11.8%)	

質問5 「レシテーションコンテスト」は「負担が大きい」という点についてはいかがですか。

そう思う	94 (36.6%)	肯定的回答数計 186(72.4%)
ややそう思う	92 (35.8%)	
どちらともいえない	54 (21.0%)	
あまりそう思わない	10 (3.9%)	
そう思わない	7 (2.7%)	

質問6 「レシテーションコンテスト」についての気持ちとしてあてはまるものをすべて選んでください。

定期試験の準備と重ならないなど、実施するタイミングを考えてほしかった。	101 (39.3%)
授業内で練習する時間をもう少し多く割いてほしかった。	140 (54.5%)
スピーチする題材として選べるものをもっと増やしてほしかった。	46 (17.9%)
スピーチ内容は自分自身で作りたかった。	28 (10.9%)
先生からの指導をもっと充実してほしかった。	37 (14.4%)
この中にはない。	42 (16.3%)

質問7 「レシテーションコンテスト」への頑張り具合について最も近いものを選んでください。

非常に頑張った。	23 (8.9%)	肯定的回答数計 149 (57.9%)
まあ頑張った。	126 (49.0%)	
どちらともいえない。	57 (22.2%)	
あまり頑張らなかった。	40 (15.6%)	
頑張らなかった。	11 (4.3%)	

質問8 レシテーションコンテスト1次予選までにあなたは何回くらい練習をしましたか。

30回以上	30 (11.7%)	10回以上計 147 (57.3%)
20回以上、30回未満	39 (15.2%)	
10回以上、20回未満	78 (30.4%)	
7回程度	38 (14.8%)	
5回程度	28 (10.9%)	
3回程度	35 (13.6%)	
0回	9 (3.5%)	

質問9 レシテーションコンテストを終えて、以下の英語の力のうち、伸ばしたいと思う力としてあてはまるものをすべて選んでください。

リスニング力（聞く力）	137 (53.3%)
スピーキング力（話す力）	202 (78.6%)
リーディング力（読む力）	110 (42.8%)
ライティング力（書く力）	92 (35.8%)
文法力	115 (44.7%)
語彙力	108 (42%)

質問10 プレゼンテーションなどの発表活動は、今後の自分の進路において（例：大学入試や就職など）どの程度役立つと思いますか。

役立つと思う。	115 (44.7%)	肯定的回答計 214 (83.2%)
やや役立つと思う。	99 (38.5%)	
どちらともいえない。	27 (10.5%)	
あまり役立つと思わない。	11 (4.3%)	
役立つと思わない。	5 (1.9%)	

質問1・2・3より、約8割の生徒は本行事を通して自身のスキルや能力の向上を実感している。具体的には、「1つ1つの英単語を正しく発音する力」、「英文をリズムよく流ちよう読みむ力」など、特に力を入れて練習をした点についてスキルや能力の向上を実感した割合が高い傾向にある。質問4・5より、この行事を楽しいと感じている生徒の割合は半数を下回っている点、負担に感じている生徒が多数を占めている点が特徴として挙げられる。また質問6からは準備に力を入れられなかった要因として定期考査の時期が重なっていることと授業内で十分な練習時間が確保されていなかったことの2点を顕著に読み取ることができる。質問1・2・3において、自身のスキルや能力の向上を感じられなかった生徒はその理由として準備に時間を割いていない、成長を感じられるほどの練習を行っていないといった記述をしていることからも、すべての生徒が達成感や充実感を得る機会を授業内で保証したり、生徒が楽しいと感じて自発的に取り組むことができる仕組みを構築したりする必要があると思われる。質問7に対するポジティブな回答の割合、質問8で10回以上の練習を行ったと答えた生徒の割合がいずれも6割に満たないことは本行事の大きな課題である。質問9・質問10からは特にスピーチングの力を伸ばしていきたい、またその必要がある、と8割近くの生徒が考えているということがわかる。グローバル教育研究推進校としてますます多くの生徒が英語によるコミュニケーション能力を高めていき、グローバル社会を生きていくうえで各自の強みとすることができるよう、日頃の授業や本行事をはじめとした各種教育活動を通して、生徒の主体的な取り組みを促すとともに充実した言語活動を中心に適切な支援を行っていく必要がある。